インド最新事情（連載）第2回
～鉄道は国家なり～

デリーメトロ第2期1号線延伸3駅区間（高架）の完成祝賀式典（Dilshad Garden駅にて）

インド三菱商事　上席取締役
吉野　宏

インドは変貌している。取り分け鉄道セクターの変貌振りは、インド国鉄改革とデリーメトロの２つの大成功が世界から賞賛されている。今年5月ラルー鉄道大臣は、自分は鉄道分野で「世界の教授」になったとマレーシアで講演した。インドは過去3年度（05～07年度）GDP9%以上の高度経済成長を達成し、今年度も8%台の成長が期待されている。経済成長を持続する為にインフラ整備が国家の急務。2008年～12年の第11次5ヶ年計画で約4,944億ドルのインフラ投資が計画されており、その13%（2兆5,800億ルピー、約629億ドル）が鉄道セクター。注目されている貨物新線計画、特に日印協力の目玉となる西回廊（デリー～ムンバイ間）の建設が東回廊（デリー～コルカタ）と一緒に本年度いよいよスタート。メトロ計画については、現在、デリー2期、バンガロール1期、そしてコルカタ東西線に円借款が供与されて具体的に計画が進められている。インドにはメトロ計画の対象となりうる人口百万人以上の都市が現在41もあり、単純にメトロが今後1案件1年毎に実現して行くと仮定すれば、向こう38年間メトロ関連商談が続くことになる。インド市場の将来性はスケールが違う。今回は、鉄道と関係が深く仏教の古里でもあるビハール州にスポットライトを当てて現在、「世界の車窓から」と言う日本のTV番組で放映されているインド豪華列車「デカン・オデッセイ号」の旅も織り込んで最新インド事情をお届けする。

1．概況

インドやネパール、スリランカ、タイ、ミャンマーなどの南方仏教国では、今年は5月20日（火）が仏陀の誕生日、悟りを開いた日、そして涅槃の日の3つが重なる満月の目出度い祝日。休日となった。満月を愛でながら温泉を楽しみ、そして悟りを開いた聖地ブッダガヤに巡礼した。この温泉は約2500年前に仏陀も入浴したと言う由緒あるもので、今でも枯れずに湧き出ていることに感謝、感激。多宝山の仏教僧に案内して戴いた。薦められて一口飲んでみたが特に問題は

写真1　ラルー・プラサド・ヤダヴ第34代鉄道大臣（60歳）ビハール州選出の下院議員（2007年8月22日シン首相主催の晩餐会にて）

写真2　鉄道省特別補佐官 スディール・クマール（52歳、執務室にて撮影）

なかった。入浴後肌はすべすべとなりご利益は大きかった。この温泉はヒンドゥー寺院の中にあり、大きさは3m四方で浴槽の底は砂地。水着を付けて入浴前に手足や体を温泉水で洗い清める。温泉に入って静かにお祈りをする。これがここの流儀。外国人が入るには何かと不自由だ。日本人が気楽に楽しめる温泉が出来れば観光客が必ずや増えるに違いない。ここはインドの東部ビハール州、その中央南部のラジギール。その昔、ブッダの時代マガダ国の首都・王舎城のあったところで、ブッダの布教伝道の一大拠点であった。後にマガダ国はインド最初の統一帝国マウリヤ朝に発展。かつての栄光今いずこ、今やインドの最貧州となったビハール州にやって来た。ここからインド最新事情をご報告申し上げる。

何故、ビハール州か？そもそもインド国鉄を語るにはビハール州ぬきには語れないのである。1998年以来この10年間の鉄道大臣にビハール州出身の2人の政治家が就任している。ニティッシュ・クマール現ビハール州首相が2期通算4年弱、そして今のラルー・プラサド・ヤダヴ鉄道大臣が1期通算4年余り。歴代で見ても独立後約61年33 人の鉄道大臣が誕生しているがその内なんと8人がビハール州出身、しかもこの8人の占める大臣在任期間は全体の約35%と他州と比較して圧倒的にビハール州出身者がかくも鉄道行政に深く関わって来た歴史がある。ラルー鉄道大臣（60歳）はこの州のゴパルガンジ生まれのカリスマ的な政治家。鉄道省スディール・クマール特別補佐官（52歳）は、ビハール州出身ではないが後述する通り彼の経歴から言ってこの州との関係は長い。インド国鉄を再生させ隆盛に導いた政策決定者はこの二人。

2001年7月インド国鉄は言わばそれまで万年赤字会社で重度の財政危機に陥っており、ラケーシュ・モハン委員会より“白い象”と蔑称されて、このままではいずれ民営化が避けられないと徹底した改革が必要と政府に答申された。以来インド国鉄の改革が始まり、2004年6月ラルー大臣就任以降、改革が加速されて大臣就任後4年間で、インド国鉄は見事に蘇った。今日の隆盛を見て世界中から注目されて、Oxford大学やWharton校、マレーシア政府やシンガポール政府などから多くの講演依頼が舞い込んで、ラルー大臣は鉄道分野で今や「世界の教授」になったと自ら語っている。インドの変貌ぶりを語るには、国家とも言うべきインド国鉄を取り上げるのが一番

写真3　政道の地　ブッダガヤの大塔（世界遺産）、ビハール州高さ50Mの祠堂（2008年5月20日現地にて）

写真4　アショカ王詔勅碑文柱頭ライオン像ハイデラバードハウス（迎賓館）の1階待合室に掲げられた国章（2007年8月22日シン首相主催晩餐会にて）

である。今年9月鉄道省はインド国鉄大変身物語を出版すると言う。同特別補佐官は、如何にして赤字のインド国鉄が国民に負担をかけることなく利益を生める体質に変化できたのか、その経緯を探る本を執筆中である。赤字で破産寸前の状態から運賃や貨物輸送料金を値上げしないで、又、民営化や減資、営業規模を縮小せずに如何にインド国鉄が利益を生める様な大変身を遂げることが出来たのか？まさにインドマジック。本のタイトルは、「Bankruptcy to Billions; How the Indian Railways transformed in four years」この本のテーマは、改革は必ずしも痛みを伴わない、国民は悩めるインドに最善を尽くすことにより、輝けるインドの為にうまくできるとクマール補佐官は語った。今日インド国鉄は現金余剰金が60億ドルを超える。この事実は如何にすばやく公営企業が灰から蘇ったのか人々を驚かせる。この背景にある経営戦略の骨格は、「より早く、より長く、より重い貨物を運べる列車」と言う3つのキーワード。

そして、インド国鉄は現在この州で3つの合言葉の動力源となるディーゼル機関車と電気機関車の2つの製造工場を新規に設立する大型計画を進めており、世界中から注目されている。又、本年度インド国鉄の超大型案件として建設がスタートする貨物専用新線計画（西回廊と東回廊）の内、東回廊（デリー～コルカタ間）にビハール州も入っている。

仏教の古里でありかつて古代インドのマウリア王朝として栄えたビハール州は21世紀に蘇るであろうか？

1）ビハール州

ビハール州は人口約8300万人、有権者約5000万人、一人当たりの州内総生産は全国最下位、識字率も男女とも最低のそれぞれ60．3%と33．6%。戦後、日本の製造業のインド進出第1号の舞台はビハール州であった。インド旭硝子が1956年ブルクンダに板ガラス製造工場をスタートした歴史がある（その後1999年ここを撤退しマハラシュトラ州のフロート工場に集約）。それは、旭硝子の戦後初の海外進出としての快挙でもあった。昨年放映されたNHK特別番組、「インドの衝撃」の中で、どちらかと言えばビハール州はインドの影として、雨漏りするトタン屋根の下に塾を開校し、そこで時に傘を差しながら必死に受験勉強する先生と学生達の夢と苦労が紹介された。しかるに、古代インドに遡ると現在の州都パトナは、マウリア王朝（紀元前317年～

写真5　ビハール州ラジギール霊鷲山、香室跡にたたずむ参拝者たち。ブッダが晩年法華経を説かれ80歳死出の旅路の出発点となった場所。（隣の多宝山頂より撮影）

写真6　ジョージ・フェルナンデス前国防大臣（78歳）、ビハール州選出の下院議員 国防大臣在任中1998年5月地下核実験を実施。日本とは40年のお付き合いと語る親日家。（議員宿舎、応接室にて）

前180年）の「花の都」（パータリプトラ）。3代目のアショカ王の時代に最盛期を迎えインド史上未曾有の統一帝国を実現した。版図はアフガニスタンの東半分を含むインダス河西方の地まで拡大。アショカ王は即位9年後に敢行したカリンガ王国（現在のオリッサ州都ブバネシュワル近郊）の平定で、約10万人を殺害し約15万人を捕虜にした。その後武断政治を反省して、仏教に帰依した王は徳治主義を政治原理とし、諸宗教の共存を願った政策を行った。仏教を保護し、戦争を放棄、民生の充実に全力を注いだ。アショカ王詔勅碑文柱頭の4匹のライオン像はインドの誇りとして現在のインド政府の国章となっている。政府関係者の名刺や紙幣、書簡に印刷されている。アショカ王が仏教に帰依し唱えた「非暴力」とこの王朝の名宰相カウティリヤが纏めたとされる「実利論」が有名。これは当時世界No.1の帝国を支えた思想と政治経済理論であった。古代インドにおいては、「法（ダルマ）」、「実利（アルタ）」、「享楽（カーマ）」が人間の3大目的と考えられていた。アショカ王は仏教等で説かれる法（ダルマ）を第一義とした。「実利論」は、揺ぎ無い権力の確保のために王がとるべき権謀術数を説いたもの。この宰相は後世になって中国の諸葛孔明に対比され得るような国民的英雄とみなされている。

昨年7月インド初の女性大統領が誕生。10月に大統領官邸での式典でお会いする機会を得たが、このプラティバ・パティル大統領（72歳）は今年2月15日～16日ビハール州ブッダガヤ、ラジギール、バイシャーリーをご主人と一緒に行幸された。ヒンドゥー教徒のパティル大統領が就任後初の国内旅行先に仏教の聖地をご訪問されたのが印象的。ヴァイシャーリーは今から2600年前当時ヴァッジ国の首都であった。当時この国では共和国政治が行われていた。7,707人の代議員が国民から選出されて、そしてその中から大統領と大臣3人が選出されて政治を行っていたと言う。即ち、インドは有権者6億人の世界最大の民主主義の国家であると同時に、世界最古の共和国政治を行った国でもある。翌日2月17日の新聞には、この大統領の訪問は「大統領、地球上最初の共和国を訪問」との大見出しで報じられた。

この州の政治は、先ほど紹介したインド国鉄を隆盛に導いたラルー・プラサド・ヤダヴ鉄道大臣が1992年～2005年迄、民族ジャナタ・ダル党首（当時）として政治の実権を握っていた。

写真7　コンカン鉄道
（マハラシュトラ州ロハ＝カルナタカ州・マンガロール区間760Km、広軌、単線、非電化、トラック設計；時速160Km、アラビア海岸沿いに走る）インド初のBOTプロジェクト（インド国鉄とマハラシュトラ州、ゴア州、カルナタカ州とが1990年7月に「Konkan RailwayCorporation Ltd.」を設立）である。

写真8　インド国鉄　チタラジャン機関車工場（1950年操業開始、西ベンガル州）　野外博物館
三菱、日立、東芝製のYAM1電気機関車

“ヤダヴ”とは“牛飼い”と言う意味の指定カーストの一つで、このカースト人口は全ビハール州人口の12.7%も占める。彼は自分のカーストを束ねてイスラム教徒（ビハール州人口の16．5%）と共闘し強い選挙地盤を確保している。パトナ大学生時代学生組合員として頭角を現し、29歳の若さで下院議員に当選。スキャンダルで何回となく苦境に立たされたが不死鳥のごとく蘇るカリスマ政治家と見られている。自分が不遇な時代であった1997～2001年には、彼の奥さんが州政府の首相に就任。一方、同大臣を支える補佐官スディル・クマール氏はハリアナ州生まれ。1982年26歳で所謂最難関である科挙試験に合格した高級官僚（IAS）。最初の赴任地から始まる彼の長いキャリアをビハール州で過ごし、同州には人脈と愛着がある。2004年9月より鉄道省に勤務。ラルー大臣就任と共に特別補佐官に昇格。因みに毎年IAS-Indian Administrative Service Officerは約100人合格するが、例年ビハール州出身者は数多く輩出することで知られる。2007年度は合格者85人中9人がビハール州出身者であった。現在この州は、ニティッシュ・クマール首相（ジャナタ・ダル統一派、57歳）がインド人民党の協力を得て政治を行っている。同首相の政治力を評価して、2008年1月世銀がビハール州向け225百万米ドルの融資契約に調印。又、アジア開発銀行（ADB）もこの州向け高速道路プロジェクトに420百万米ドル融資を検討中で、来年始め融資契約の調印が期待されている。世銀やADBが先行してローンを実施しインフラ整備に資金協力すれば円借款や民間融資などが後に続きやすくなるので、この国際金融機関の融資動向は重要であり注目される。

コンカン鉄道路線図

写真9　写真8で紹介する電気機関車のネームプレート

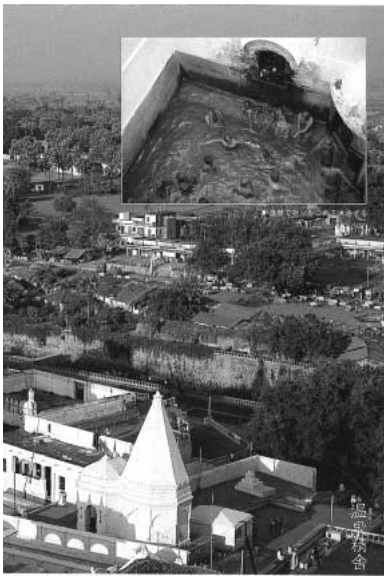


写真10　ビハール州ラジギール温泉精舎（「ブッダの生涯」小林正典、三友量順より抜粋）

さて、この州にはもう一人有力な下院議員、ラルー・プラサド・ヤダヴ鉄道大臣の政敵である、ジョージ・フェルナンデス前国防大臣（78歳、ジャナタ・ダル統一派）がいる。彼の一人息子は日本女性と結婚。彼の人生は波瀾万丈に富んでおり、インド国鉄と関係は非常に深い。

1973～77年インド国鉄労働組合の委員長として、1974年5月には史上最大のインド国鉄ゼネスト（国鉄職員170万人中、約130万人の組合員を動員した全国規模のゼネスト）を指導。時のインディラ・ガンジー首相と対決した事は今でも語り草。そして一転して1989～90年鉄道大臣に大変身。大臣の生まれ故郷であるカルナタカ州（マンガロール）とゴア特別州、そしてムンバイのマハラシュトラ州間を結ぶ760Kmの海岸沿い区間を走るコンカン鉄道（1998年完成）の実現に向けて、デリー地下鉄公社スリーダラン総裁（1997年11月就任）と深く関わった。同総裁を当時コンカン鉄道総裁（期間：1990年6月～1997年11月）に抜擢したのは他ならぬフェルナンデス鉄道大臣であったと言われる。後に報告する豪華列車デカン・オデッセイ号の旅では、ムンバイからゴア迄の間にこの鉄道を走る。2001～4年国防大臣を歴任して、この際にラジギールにミサイル工場を誘致した。仏教の聖地に物騒なものである。工場は不夜城となっている。おりしも、インドは今年5月7日核弾頭搭載可能弾道ミサイルAgni-Ⅲ（射程距離3,500Km）発射実験に成功して中国の北京・上海を射程距離に入れた。インド政府は、Agni-V（射程距離5,000Km）の開発準備は既に完了しており、同モデルを紹介しながら、今後2年以内にミサイルの設計を完了する計画であることを明らかにした。

インド国鉄は、PPP（Public Private Partnership）スキームにより、ディーゼル機関車工場と電気機関車工場をそれぞれビハール州西部サラン地区Marhoura、及び東部Madhepura地区Madhepuraにて設立する為の合弁パートナーを決める国際入札を進めて注目されている。

これは久々の機関車商談なのでこの機会に参考までに調べて見たところ、インド国鉄向けに日本製の機関車は1941年以来合計801両納入されていることが判明。406両の蒸気機関車と395両のディーゼル・電気機関車を三菱電機、川崎重工、日立、日本車両、東芝が納入している。電気機関車について言えば、1950年～60年代に初めてイグナイトロン電気機関車が三菱電機ー日立ー東芝連合によって103両納入された歴史がある。これは、1957年インド

写真11　ビハール州ナーランダ　玄奘三蔵祈念堂

写真12　「仏教伝来」1959年作インドへの長い旅の帰途、オアシスにいる玄奘三蔵を描いている。（平山郁夫　祈りの旅路　東京展　2007年9月東京国立近代美術館、図録より）

国鉄が第2次5ヶ年計画の最重要工事として25キロボルト、50ヘルツ、単相交流の幹線電化計画の実施に踏み出したがそれに対応した案件である。当時、日本の国鉄では新幹線の生みの親である島秀雄技師長よりご支援を頂いた歴史がある。この通称イグノコは、北陸線の交流電化に使用されたもので、数年前までインド南部で活躍し最近長寿を全うしたとインド国鉄関係OBより聞かされた。

2）ナーランダ大学の復興

仏教の観点から見ると、8大聖地のうちビハール州は3大聖地；政道の地・ブッダガヤ（世界遺産）、竹林精舎・ラジギール、猿王奉蜜・ヴァイシャーリーを保有する。ラジギールの近郊では酸化鉄の鉱片が外層として現れて岩から剥ぎ取ることが出来てそれを木炭の火で精錬して白熱状態で打ち伸ばして道具に加工された。ここは鉄生産の一大中心地として栄えた。そして仏陀の布教の大きな拠点となった。法華経を説いた霊鷲山や仏陀が最初に持った僧房、竹林精舎がある。温泉はこの竹林精舎の隣のヒンドゥー寺院の中にある。ブッダガヤはラジギールの南西に車で1時間。北に車で30分行くとナーランダがある。ナーランダは7世紀玄奘三蔵が留学した仏教大学。2006年この遺跡の傍に印中友好のシンボルとして玄奘記念堂が落成し新たな名所となった。この祈念堂には鐘がありこれを突いた音色は印中日合作で、これが祇園精舎ならぬナーランダで聴く「諸行無常の響き」なのかと印象的。画家・平山郁夫は玄奘三蔵のシルクロードの旅を主題に描き、現在日本を代表してナーランダ大学（於：ラジギール）の復興にご尽力されている。この辺の事情は次のとおりである。

①中国の玄奘三蔵（602乃至600～664）は629年西安を出発しシルクロードを歩いてインド・ナーランダ大僧院に留学し645年中国に帰国。17年間で3万キロ歩いたと言われる。皇帝より命じられて「大唐西域記」を提出。これは、極めて整然と中央アジア・インド諸国の情勢が記された一大地誌。国名、大きさ、都城、物産、気候、住民の気質、言語、衣服、貨幣、王、仏教や他の宗教の状況等記述は正確で抜きん出た第1級資料と評価されている。因みに私が楽しんだラジギールの温泉と思える記述は、巻第九（摩掲陀国下）二・三　杖林付近の遺跡と言う段落に、「温泉が2ヶ所ある。その湯は非常に熱い。その昔に如来が法力でこの湯を出し、中で沐

写真13　デカン・オデッセイ号
（テレビ朝日「世界の車窓から」インド編にて8月10日まで毎日放映予定）

写真14　デカン・オデッセイ号　食堂車
夕食時ギターの生演奏付き

浴された。今日も存在しており、清流は減じることがない。遠近の人はみなやって来て入浴している。長患いや持病でも治癒するものが多い。」と記録されている。さて後に、史実「大唐西域記」は、小説「西遊記」として集大成された。中国の元の時代に原型が完成、明の時代1592年に南京で刊行された西域記が現存する最古で最長のテキストとして世界に広まった。主人公の孫悟空はインドの猿の神様「ハヌマーン」とその活躍した神話「ラーマーヤナ」と関係があると言われる。

②道昭菩薩は653年遣唐使として入唐し、玄奘三蔵に直接教えを受けた。661年帰国して教えを広めた。一方、1942年南京で旧日本陸軍高森部隊が玄奘の頂骨を発見。分骨されて戦時中は埼玉県岩槻市慈恩寺に仮安置。1980年奈良薬師寺へ分骨、1984年同寺に玄奘三蔵院伽藍が完成。玄奘三蔵は印中日の架け橋的な存在となった。

③画家平山郁夫（77歳、広島県出身、15歳の時に被爆）は、1959年院展に「仏教伝来」を発表。この作品が画家として出発点となったもので、玄奘三蔵の命がけの求法の生き様に自分の平和の祈りをこめて描いたと言う。2001年元旦に奈良薬師寺玄奘三蔵院伽藍の大壁画「大唐西域壁画」を完成させた。

薬師寺にて購入した大唐西域画の絵葉書10枚セット

④2007年1月東アジアサミットでナーランダ大学の復興が合意された。顧問会議が7月シンガポールで開催、12月東京で第2回会議、2008年は中国、そしてインドで開催される予定。

おりしも、インド外交の中で特に隣国中国との関係改善が図られていることが注目される。今年2月

写真15　デカン・オデッセイ号　客車入り口
レッドカーペット付でお出迎え

写真16　デカン・オデッセイ号の客室（ツインベッド）

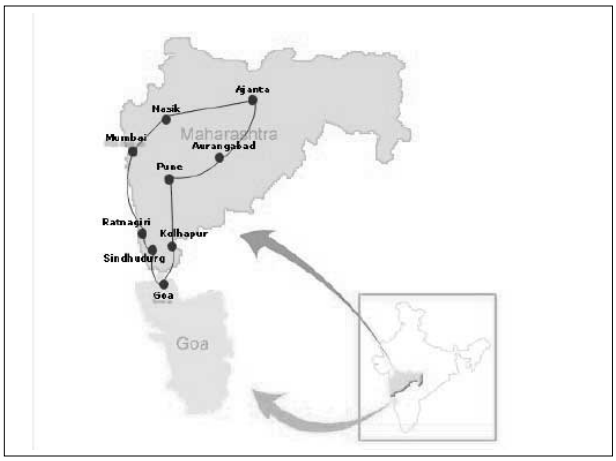
発行のインド経済白書に拠れば、2007年中国は米国を抜いてインドの最大の貿易パートナーとなったと発表があった。1月～11月で342億ドルに拡大。前年比53%増。2003年6月時点でたったの50億ドルであったので驚異的な商流の伸びが出来つつある。インド企業は100社以上中国にオフィスを開設している。中国にとってはインドは10番目の輸出相手国で15番目の輸入相手国だが、インドから見れば輸出先として第3位（主な品目は鉄鉱石、鉱物資源、綿原料）、輸入先で第1位である（主な品目は電機製品、機械類、鉄鋼製品）。国境画定問題が解決してはいないが実利を取る方針。シン首相の強い思いにより、今年初めてインドの国家表彰がヒマラヤを越え、中国のインド研究家、季羨林（97歳）に勲3等蓮華の輪（Padma Bhushan）が授与された。シン首相の今年1月中国訪問の結果、中印両国友好の証として今回初の中国人表彰を中国側は歓迎している。ムカジー外相は6月5日（木）極めて異例なことだが、自ら北京の入院先である軍事病院に季羨林老師をお見舞いし、記念のメダルと叙勲証書を手渡した。これにはメノン外務省次官とラオ駐印インド大使が同席した。21世紀はアジアの世紀を迎えて、両国の存在感が日に日に増して来て、アジアは日中印の3ヶ国のバランスに左右されるようになった。新たな国家間の競争が生じている。

2．鉄道事情

さて、インドの楽しい鉄道の旅そして鉄道関係のホットな話題をご報告申し上げる。

1）豪華列車デカン・オデッセイ号の旅

私は今年2月豪華列車、デカン・オデッセイ号に乗り一人旅をした。この列車の旅は日本に既に紹介さ



デカン・オデッセイ号ルートマップ

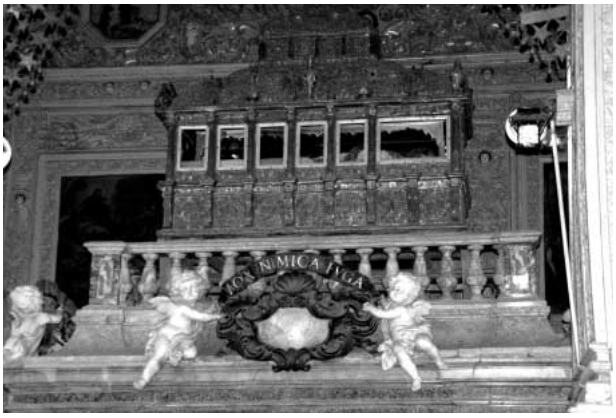


写真17　ゴアのイエズス会教会1594年の建設（世界遺産）日本の戦国時代にやって来た聖フランシスコ・ザビエルがここに眠る。

写真18　エローラ石窟群（マハラシュトラ州世界遺産）カイラス寺院にて一緒に旅したご婦人方の記念撮影

れており、日本初の特別チャーター企画；関空（札幌）・中部・福岡発着2008年2月12日発～22日着、料金588,000円で丁度私の旅の1週間前、2月13日ムンバイ発～2月20日ムンバイ帰着の2,700Km、7泊8日の旅程で、総勢75名の日本人観光客を集めて貸切運行された。又、今年3月5日テレビ朝日による世界豪華列車の旅と言う番組で、第2回アジア・オセアニア編で「デカン・オデッセイ号～歴史の街と絶景の海岸線インド屈指の観光地をめぐる旅」と題して放映もされた。アナウンサーは上山千穂、コメンテーターは石原良純のコンビ。この旅は2004年1月にデビューしたが、最近日本でも知られる様になり日本人利用客が増えて来ていると聞かされた。「世界の車窓から」と言うおなじみの鉄道番組で、この旅は5月26日から8月10日まで放送される。又、4月18日BS朝日UK-Japan2008公認番組BBC地球伝説「素晴らしい列車の旅、インド東から西へ」が放送された。英国コメデイー作家・TVタレント、イワン・ヒスロップが案内役として解説。この中で4種類の列車に乗って街と人々と風物が紹介されている。

●カルカッタ地下鉄、及び

●インド国鉄、①ラジダニ急行　1等寝台に乗ってコルカタの「ハウラ駅」から「デリー駅」（1,600Km）②普通列車で「デリー駅」から「アグラ駅」そして「ジャイプール駅」（157Km）、次に③走る宮殿列車でジャイプール駅～ジョドプール駅～最後にジャイサルメール駅」（613Km）

インド鉄道の旅が日本でこのように頻繁に紹介されていることを知らされて、日本でのインド理解が深まる機会が増えて真に喜ばしいと思う。

さて、この豪華列車の旅は6泊7日だが途中参加も可能。私は2月23日朝ゴアからツアーに参加して、4つの世界遺産；ゴアの教会と修道院、エローラ石窟群、アジャンタ石窟群、そしてムンバイCST駅を中心に見学、2月27日朝ムンバイに到着する4泊5日の旅程を楽しんだ。日中見学して夜寝ている間に移動すると言う列車をホテル代わりにする非常に効率の良い旅で、料金は税込で約2千ドル。下車する駅ごとに民族衣装をまとった地元の観光団から熱い歓迎を受けて、その土地の歴史と産物の紹介を受け、人々の生き様を目の当たりにする。列車の中は5つ星ホテルで食事も美味しく快適。ゴアの海岸風景から、日中の太陽の日差しが厳しい内陸の緑の少ない赤茶けたデカン高原を行く旅は様相が一変。あまりに太陽は厳し過ぎて夜の月がとてつもなく優しく映

写真19　オーランガバードにある通称ミニ・タジマハール、ビー・ビー・カ・マクバラ（1679年建造、マハラシュトラ州オーランガバード）ムガール王朝第6代皇帝アウランゼーブ帝の息子が母親に建てたお墓。

写真20　フマユーン廟（1572年建造、ニューデリー、世界遺産）ムガール王朝創始者ハーブル帝の息子フマユーン帝（在位1531～1556年）を偲び后が建てたお墓

る。一緒になった旅人は米国、英国、ドイツ、そして香港、台湾、なんとメキシコからも来ておりさまざま。カップルや家族連れ、団体や私の様な一人旅とさまざま。日本政府（JBIC）は観光基盤としてのインフラ整備、遺跡や伝統文化の保護と地域振興の両立を通じた地域開発を支援中。その代表がアジャンタ・エローラ遺跡保護・観光基盤整備事業であり、オーランガバード空港や道路、上水道整備し、現在博物館・レストラン等を包含したツーリストセンター建設に円借款を供与。鉄道、空路、道路と3拍子そろったインフラ整備により、このインドが誇る世界遺産が世界中の人々に容易に楽しむことができるようになって来たと感じる。

●デカン・オデッセイ号の概要

①ディーゼル機関車（3,300馬力、最高速度80Km）と3つの発電機車輌プラス21車輌（1車輌の長さ22メートル、インド製）、ブロードゲージ（1,676MM）内訳　★13寝台列車（合計48キャビン：4プレジンデンシャルスイート、5ダブルベッドルーム、39ツインルーム）　私はツインに宿泊。トイレとシャワーが各部屋に完備。温水が豊富に使える。★5共有列車　2レストラン、1バー、1ビジネスセンター、1SPA

②配列（進行方向に向かって）全体の構成：ディーゼル機関車＋2台の発電機＋列車（中央に共有列車）＋1台の発電機、列車部分：客室列車：ツイン、或いはダブル＋スイート＋共有列車：SPA＋会議室＋キッチン＋レストラン＋キッチン＋レストラン＋バー＋客室列車：スイート＋ツイン或いはダブル

③収容人員数

★最大収容客数：96人　最低乗客数15人

★スタッフ　合計55人、内訳：インド国鉄運行スタッフ14人、
TAJ　MAHAL HOTELより派遣されたサービススタッフ41人

④運営はインド国鉄とマハラシュトラ州観光局が運営し、客室サービスは　TAJ　MAHAL HOTELが行っている。

⑤運行状況10月～4月、毎週水曜日ムンバイ出発。5月から9月は雨季で運休。

今シーズンは毎週最低15人以上の日本人が参加。1回は75人の日本人に初めて貸し切られた。

●旅の概要

2月23日（土）午前7時半　列車はゴア・カルマ

写真21　タージ・マハル（1643年建造、UP州世界遺産）欧州・中近東からもやって来た労働者2万人が11年の歳月をかけて第5代シャー・ジャハーンがお后のお墓として建造。大理石で出来た世界の奇跡。奥様を愛しすぎて傾国と息子のアウランゼーブに見られ、シャー・ジャハンは晩年幽閉される。

写真22　アジャンタ石窟群（マハラシュトラ州、世界遺産）ワゴーラ川がカーブして渓谷になった断崖に仏教徒たちは数百年（紀元前2世紀～紀元7世紀）かけて寺院を30あまり建設。壁画と彫刻が素晴らしい。アジャンタの創造者は7世紀頃これを遺棄しエローラ洞窟に謎の移動

リ駅に到着、ここから参加。一日バスで市内移動。午前は、14～16世紀ポルトガルの植民地であった北の旧ゴアにあるコロニアル・ルネサンスとバロック建築の教会や修道院を見学。中でも日本史に登場する聖フランシスコ・ザビエルが眠るイエズス教会（1594年建設）が白眉。ザビエルはインドと日本にクリスマスの習慣をもたらした。鹿児島にザビエル公園がある。その後、ゴア特別州の都パンジム市内を見学。特にポルトガル人がかつて住んだ街並に情緒がある。昼は南に下り、海岸リゾートホテルのタジで昼食をとり休憩。午後4時にゴア・マドゴアン駅を出発。海岸線から内陸、デカン高原に入る。

2月24日（日）午前　車内で朝食。その後マハラシュトラ州コラプール市のマハラジャ宮殿とヒンドゥー寺院を見学。11時40分列車に戻り昼食。プネ市に向けて出発。夜7時半プネに到着。市内の博物館を見学し9時半列車に戻る。遅い夕食を列車で取る。プネは18世紀マラータ王国の首都として栄えた街。現在はITタウン、そしてタタ自動車やベンツの工場が並ぶ自動車産業都市。日本語熱がインドで一番高い。

2月25日（月）午前オーランガバード駅に到着。ダウタラアバード城（注1）、そしてエローラ石窟（注2）を見学。昼食は市内に戻りタジホテルで取る。午後は市内にあるビービー・カ・マクバラー（注3）を見学。午後5時15分、同駅に戻り、次の目的地ジャルガオン駅に向かう。

注1：中世13世紀、石つくりのイスラム教徒の城。インドで2番目の高さのミナールがある。

注2：エローラ村にある自然の岩山を丸ごと削り出して、合計34の寺院；12の仏教関連の洞窟No.1～No.10（紀元7世紀の建立）、No.11～No.12は紀元8世紀の建立。11の僧院と1つの礼拝堂からなる。次に17のヒンドゥー教関連の洞窟No.13～No.29（紀元7世紀から9世紀に建立）ですべてシバ神に捧げられている。No.16が最も有名なカイラース寺院（前号のグラビア写真ご参照）。古代インドの力を知るにはこの寺院を見学するのが一番。そして5つのジャイナ教関連洞窟No.30～No.34（紀元9世紀～11世紀に建立）が隣り合って仲良く並んで建てられている。

注3：ムガール王朝第6代皇帝アウランゼーブの后のお墓。タージマハルを模したコンパクトサイズなので、ミニ・タージマハルと呼ばれる。

写真23　アジャンタ壁画有名な蓮華手菩薩
岡倉天心が写真24の金剛手菩薩を併せて法隆寺金堂壁画の原型と指摘。

写真24　アジャンタ壁画　有名な金剛手菩薩
日本画家・杉本哲郎によるこの壁画の模写が60年ぶりに京都国立博物館で公開中（7月27日まで）

第2代皇帝フマユーン（在位：1531～1556年）を偲び后が建てたフマユーン廟（建造期間：1564年～1572年、ニューデリーにある世界遺産）、それを見た第5代皇帝シャージャハン（1592～1666）が后に贈った壮大華麗なタージマハル（アグラにある世界遺産）、そしてこのお墓はシャージャハン皇帝を幽閉して帝位についた第6代皇帝の息子が母親に造ったお墓。1679年の建造で、20%が大理石で残りは砂岩でできており、つつましい感じがする。

2月26日（火）午前；アジャンタ最寄のジャルガオン駅に到着。午前中一杯アジャンタ洞窟群を見学。1817年トラ狩をする英国人兵士によって馬蹄形の渓谷に人里離れた洞窟が発見されてアジャンタ芸術（仏教壁画と彫刻）が世界に知られる様になったと伝えられている。仏教徒たちは切り立った断崖に岩を削って寺院を30あまり建造。建造時期は第1期紀元前2世紀から紀元2世紀、そして第2期はグプタ朝時代（5世紀から6世紀）。中でも、第1窟の壁画、蓮華手菩薩と第26窟の涅槃像が有名だが、さすがにそれを前にすると作者の魂に圧倒される思いがする。1986年に訪問した中国の敦煌にある莫高窟（製作時期：紀元4～14世紀）を思い出す。アジャンタは敦煌の原型でシルクロードで繋がった街に感じる。午後、列車に戻り昼食をとりながら、次の目的地、ヒンドゥー教の聖地ナシックに向かう。夕方、到着。聖なるゴダバリ河畔を散歩。その後、神話ラーマーヤナの一舞台となっているラーマ王子とシータ妃の隠れ屋を見学。列車に戻り夕食。

2月27日（水）最終地ムンバイ、チャトラパティ・シバージー・ターミナス（CST駅）に到着。午前7時朝食をとり、午前8時にチェックアウト。この列車は午後4時40分に次の7日間のインドの魂を散策する旅に出発する。事前にアポイントを取ったインド国鉄セントラルレイルウェイ主席広報官マッドゲリカー氏をこの駅の彼のオフィスに尋ねてご挨拶。この駅は1897年に完成したベネチアン・ゴシック様式で2004年に世界遺産に登録。チャトラパティ・シバージーとは17世紀この地を支配したマラタ王国の王様の名前。ムンバイ国際空港の名前にも使われている。

2）最近の話題

2月末2008年度鉄道予算が鉄道大臣より、そして続いて国家予算が財務大臣より発表され、4月予算国会

写真25　アジャンタ彫刻として有名な涅槃像アジャンタ仏教美術最高傑作の一つ

写真26　コルカタ＝ダッカ間500Km国際列車“Friendship Express”2008年4月14日コルカタ発、料金はクラスによって片道8～20ドル相当。両国より毎週末1往復（写真はパキスタン・Top Newsより）

が始まった。4月上院の予算議会での質問に答えて、ジャイパル・レディー都市開発大臣は、「現在政府は、ムンバイ、ハイデラバード、チェンナイ、コルカタ、コチンの各都市の地下鉄計画の承認手続きを進めており計画促進を図っている。今後2年以内には建設工事を開始できるだろう。」と語った。メトロ計画はデリーとバンガロールの他、5都市が具体的に計画対象となっている。インドにはメトロが必要な人口百万都市が全部で現在41あるが、未だその内の7都市で計画が動き出しただけ。この先のメトロ計画の将来性は洋々たるものがある。インド国鉄とメトロに関する話題を新聞や雑誌に報道された中からいくつか紹介したい。

●インド国鉄関係

①インドーバングラデシュ間（406Km）国際列車43年ぶり運行再開

1965年バングラデシュが東パキスタン時代起きた印パ戦争時に運行が止まったインド＝バングラデシュ国際列車、“Maitree（Friendship Express”が、ベンガルの新年にあたる4月14日（月）午前7時10分コルカタを出発。14日午後8時半首都ダッカに到着。列車は客車6両と食堂車1両編成で週2便（土と日）往復運行する。ラルー鉄道大臣は、「この歴史的な日はインド＝バングラ両国の栄光の歴史に新たな1ページを加えるもの。両国は地理的に分かれてはいるが、両国の人々の魂は結ばれている。」と語った。

②ラルー鉄道大臣の福袋

2007年度インド国鉄は当初目標額785百万トン、後の上方改定目標額790百万トンに対し794百万トンの貨物輸送を達成。前年度比65.59百万トン増で、これは2006年度達成した最高記録646.1百万トンをも超えた新記録。この記録達成に対し、鉄道大臣は総額174百万ルピー（約4.5億円）の賞金を全てのオフィサー及びスタッフに支給。インド国鉄ジェナ総裁に拠れば、2007年度の収入は、旅客輸送では14.4％増、貨物輸送で13.5％増であったと説明。2008年度の貨物輸送の目標額は850百万トンで2011年には1,100百万トンを野心的な目標に挑戦するとも語った。

③インドとイランが鉄道関係でMOUを締結

2008年4月13日テヘランにて、インド国鉄ジェナ総裁は、イラン国鉄ハッサン・ジアリ社長と両者の協力関係を結ぶMOUに調印した。イラン技術者の技術トレーニング、信号計画、機関車とその予備品供与などの協力、そしてジョイント・ワーキンググループの設置を含む。又、世

写真27　デリーメトロ公社スリーダラン総裁が2007年国民大賞及び国民賞・Public Service部門を授賞。2008年2月2日メディア（CCNとReliance傘下のIBN）が国民投票なども考慮の上審査。同総裁は国家叙勲とあせてトリプル授賞に輝いた。左から同総裁、アンサリ副大統領、カラム前大統領。（授賞式典より、写真はデリー地下鉄公社ご提供）

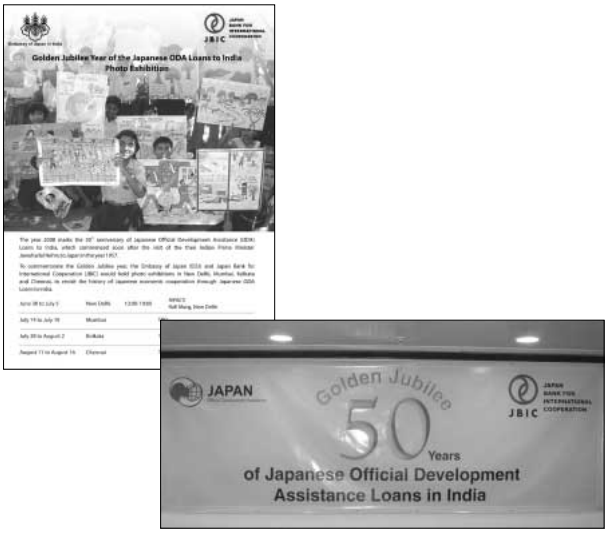


写真28　円借款50周年記念横断幕と記念写真会への案内状（JBICご提供）

界鉄道連盟（UIC）との協力関係を深めるべくお互いに一緒に努力すること、及びインド＝イラン＝ロシア鉄道網の作業を開始することも含まれる。更に、イラン東南部のChabahar自由貿易ゾーンと同国中央部のFahrej市を結ぶ新線建設計画に、インドからの投資を歓迎することも謳われた。イランは港湾と連結する鉄道敷設にインド国鉄からの協力に興味を持っている。

④インド国鉄がフランス国鉄と鉄道近代化に関するMOUを締結

5月14日（水）インド国鉄はフランス国鉄SNCF　Internationalと鉄道インフラの近代化に関しMOUを締結した。調印は仏鉄道副大臣Dominique Bussereauとインド鉄道副大臣Naranbhai Rathwaの立会いの下で行われた。近代化協力の分野としては、軌道、安全走行、保守、軌道と設備の近代化、シグナル、テレコミュニケーション、電力、トレーニング、高速鉄道プロジェクト、地域・都市開発分野と広範囲に及ぶ。「この合意書は3年間有効で、双方にメリットあるもの。インド国鉄はこれまで、オーストリア、ドイツ、イタリア、ロシア、南アフリカ、中国とそれぞれ2ヶ国間協力合意書に調印している」とインド国鉄ジェナ総裁は語った。

⑤インドはマレーシアより10億ドル鉄道プロジェクトを受注

2008年5月16日（金）ラルー・プラサド・ヤダヴ鉄道大臣は、マレーシア政府Ong Tee Keat運輸大臣とクアラルンプールにて10億ドルの鉄道建設契約調印に立ち会った。今年1月Indian Railway Construciton（Ircon）International Ltd.（インド国鉄子会社）はマレーシアSeremban-Gemas区間103Kmの電化複線高速鉄道建設をターン・キーで受注。受注金額は10億ドルでIrcon社が外国より受注した契約の中では最大の規模でこの契約納期は4年。34の河川橋、107の小さい橋、8kmの長さのトンネル工事が含まれる。因みに、Ircon社はこれまで同国で11件の鉄道建設契約を受注し完工実績がある。又、Ircon社はマレーシア鉄道と数年間の機関車リース契約を持っており、現在1年毎の契約更新となっている。

●デリーメトロ関係

①スリーダラン総裁の授賞

去る1月25日共和国記念日の前日、インド政府は2008年の国家叙勲119名（勲2等13人、勲3

写真29　インド古典舞踊家　小野雅子女史。紀元前2世紀からの歴史を持つオディッシーダンスの踊り子。（2008年5月26日インド外務省主催のインド古典舞踊会、彼女の踊りの最後の場面、シバ神への祈り。神の力が踊り子を通じて観客に降りて来るクライマックス）

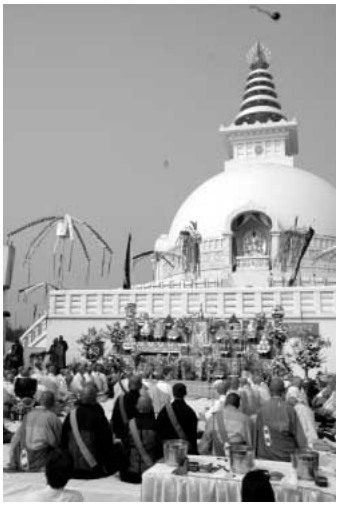


写真30　デリーの新名所　世界平和の仏舎利塔（ヤムナー河畔、インドラプラスタ公園）2007年11月14日落慶法要にてダライ・ラマ14世が祝辞

等35人、勲4等71人）受賞者を発表した。Padma Vibhushan（勲2等 蓮花褒章）をデリーメトロ公社スリー・ダラン総裁が授賞。更に、去る2月2日メデイア（CCNとReliance傘下のIBN）が国民投票なども考慮して選ぶ2007年国民大賞及び、国民賞・Public　Service部門賞が同総裁に授与されて同総裁はトリプル授賞となった。5月10日（土）大統領宮殿にてパティル大統領より同総裁やタタ財閥総帥ラタン・タタ,そして世界の鉄鋼王ラクシュミ・ミッタル他8名、合計11名宛てに勲2等蓮花褒章が授与された。

②デリーメトロ創立14周年

5月3日デリーメトロは創立14周年を迎えた。記念式典でスリーダラン総裁は、デリーメトロの成功の秘訣は“work culture”であり、「時間厳守」と「時は金なり」。そして社員の団結と専門能力の高さが必ずや第2期計画を予定期限内に完成させることに自信があると表明した。又、列車の99.9%の定時運行を達成・維持していることがハイライトされた。

現在、JICAはインド政府の要請を受けてデリーメトロに技術協力専門家派遣（無償）を行なっている。安全運行能力専門家と車両維持管理専門家の2種の専門家。いずれも東京メトロ出身者が現場に派遣されて、言わば日本固有の鉄道技術である高密度な定時安全輸送とそれを支えている車両維持管理に関する技術の移転に挑戦している。派遣状況は、安全運行能力専門家2名は第2回派遣：8月24日～9月6日（第1回派遣2月24日～3月2日）、車両維持管理運行専門家1名は第2回：6月8日～10月7日（第1回：2月8日～5月4日）が予定されている。現在のデリーメトロの乗客数は約一日76万人、この国の乗客達は整列乗車が出来ていない。日本の技術が移転されて、ピーク時6分間隔の現在のダイヤがどれだけ短縮できるのか、毎日の車両点検をメンテ技術のレヴェルを上げてどれだけ節約出来るのか、極めて大きな効果が期待できる課題である。一方、日本での地下鉄車両維持管理安全走行能力向上研修が2008年12月頃から1ヶ月3名を招待して開催される予定。日本の協力は資金・ハード協力から日本固有技術の協力へと裾野が広がりつつある。

③デリーメトロ2期計画（総延長120.8Km）、6月4日（水）1号線の延伸が開通

デリーメトロは１号線の延伸Shahdara=Dilshad Garden3駅区間3.1Km（高架）が6月4日商業運転を開始。前日3日(火）晩ジャイパル・レディ

写真31　国際非暴力の日（10月2日インド国父マハトマ・ガンジーの誕生日）2007年10月2日国父ご生誕式典終了後の風景（デリー市内のガンジー・スミリティー博物館）

写真32　コルカタの新名所　印日文化センター2007年8月23日安倍前総理開館式にご出席（MCPI社池川社長ご寄贈）

一都市開発大臣とデリー特別州シーラ・デキシット首相を主賓に迎えて開通記念式典が開催された。工事は2006年4月に開始、今年12月に完工予定であったが7ヶ月も早く完工を達成。この開通区間は1号線の東の端、ＵＰ州との州境の街Dilshad Gardenまでの延伸3駅区間。ＵＰ州からはバスで乗り入れて連結させる計画。

3．日印交流

デリー地下鉄公社スリーダラン総裁の授賞風景をTVで見ていると、デリー地下鉄の成功がインド国民に広く支持されている証と実感。そして、その実現に日本の官民が協力して来ていることは、日印交流の成功例として誇りに思う。インドにお越しなる皆様に知っておいてもらいたい日印交流に関し、次の通り2点申し上げる。

①現状

1939年に結成されたデリーで一番古く由緒のあるデリーロータリクラブで5月29日（木）昼食会が開催されて出席。日本人ゲストとしてインド古典舞踊オディッシーダンスの舞踊家、小野雅子女史（インド在住12年）が招待されて「インドの大地を踏んだ大和撫子」と題する講演をされた。日本人としての招待講演は2006年2月9日榎　前大使による「日印を結ぶ文化、地下水脈」"Japan and India: A Strong Cultural and Historical bond"の大使講演以来である。デリーメトロが日印経済協力の成功例であるが、一方で日印文化交流での成功例は、彼女の日印のみならず、之まで米国、カナダ、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシアでの第三国におけるインド古典舞踊公演での活躍ぶりと激賞された。

日印交流は、政治、経済、文化、学術など幅広く且つ深くなって来ていることを実感。在ニューデリー日本大使館が纏めた数字をご覧戴きたい。

日印の人的交流　年度比較（在インド、日本大使館資料より）

	2006年度	2007年度
日系企業の進出社数	2007年2月現在 362社	2008年1月現在 428社
（拠点）	（450拠点）	（555拠点）
在留邦人数	2,346人（10月現在）	2,842人（11月現在）
デリー地区	1,208人	1,490人
コルカタ地区	172人	179人
チェンナイ地区	549人	692人
ムンバイ地区	417人	460人
観光客数	日→印:119,292人 印→日: 62,505人	未発表 67,583人

備考）デリー地区：ニューデリー、グルガオン、ノイダ、バナラシ、他　コルカタ地区：コルカタ、プルリア、シャンティニケタン、プリー、ハルデイア、他　チェンナイ地区：チェンナイ、バンガロール、他　ムンバイ地区：ムンバイ、プネ、ゴア、アーメダバード、バローダ、他

2006年以来日印両国首脳は毎年交互に相手国を訪問して2ヶ国協議を行っている。シン首相の訪日は、今年7月の洞爺湖サミット後の10月の見込みと言われている。又、2007年度インド向け円借款は総額2,251億3,000万円に増大（前年度比21％増）しインドは最大の受恵国となっている。因みに、円借款は最初にインドに供与されてスタートし今年は50周年を迎えている。

②2つの日印交流50周年の記念碑

昨年は日印交流50周年の年であった。昨年8月21日～23日安倍前総理はデリーとコルカタをご訪問された。今回の首相の訪問は、首相の国会演説もあったこともあり、インド国民に日印関係の歴史を振り返って貰う良い機会ともなった。インド人の友人から、受験問題にも出題されないので日印関係の歴史は勉強もしなかったが今回それを勉強する良い機会となったとのコメントを貰った。おりしも日本では2008年1月の大学入試センター試験、世界史Bにインドが出題されたことは印象的。総じて2つの記念碑が残ったので紹介する。

★世界平和の仏舎利塔（デリーに新たな名所）

昨年11月14日（水）ネルー、インド初代首相の誕生日にデリーで世界平和の仏舎利塔の落慶法要が開催された。これはデリーに新たな名所の誕生、日印協力の名所とも言えて真に喜ばしい。この仏舎利塔は、インド国父ガンジーと初代首相ネルーの友人でもあり、1978年ネルー国際理解賞を受賞された日蓮宗系日本山妙法寺山主、藤井日達上人のご発願と授賞賞金が元手となって、日印協力により完成迄に約30年を要した。ドーム型で高さは30M、今後之に付属する日本庭園も造られる。インドで6番目の世界平和の仏舎利塔である。他に、ラジギール（多宝山頂）、ヴァイシャーリー、ブバネシュワル、ワルダ、そしてダージリンにある。

この式典に先立つ10月2日国父マハトマ・ガンジーの誕生日は昨年は特別であった。国連がこの日を「国際非暴力の日」として決議し全世界がお祝いしたのだ。当日午前8時～9時デリーのラージガート（ガンジーが荼毘にふされた場所）で記念式典が行われた。式典は緑の芝生に白いシーツで覆われた会場中央座敷席に世界の主だった9つの宗教の代表者が集い、世界平和の祈りで始まった。最初は仏教、次にイスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教と続き、晴れ渡った秋の青空にこだまする中、パティル大統領他が紅いバラの花びらを記念碑に捧げて次々にご参拝。仏舎利塔はこのラージガートの並びに立地している。世界至る所で紛争、暴力、テロなど武力が横行している今日、ガンジーが唱えた非暴力主義の重要性が益々増している。非暴力で平和を勝ち取ると言うのがインド建国の精神。世界平和の仏舎利塔落慶式典で、ダライラマ14世は非暴力による世界平和のお祈りを捧げた。世界がこのインドの非暴力思想を見習おうとしている。

★印日文化センター（コルカタに新たな名所）

昨年8月23日（水）安倍前総理はコルカタにある印日文化センターの開館式に出席した。バッタチャルジー・西ベンガル州首相、チャクラバルティ・バングラアカデミー会長、チャットパドヤイ同センター館長、我妻日印タゴール協会事務局長（麗澤大学教授）、池川コルカタ日本人会会長、富沢三菱化学会長が出席。戦前・終戦の日印交流は、ベンガル出身の詩聖ラビンドラナート・タゴールや2人のボーズ即ち、スバス・チャンドラ・ボーズとビハリ・ボーズ（新宿中村屋のボーズ）、そしてラダ・ビノド・パール判事が日本と緊密な関係があった。両国関係強化の原点となるべきコルカタに印日文化センターが設立されたことは喜ばしい。

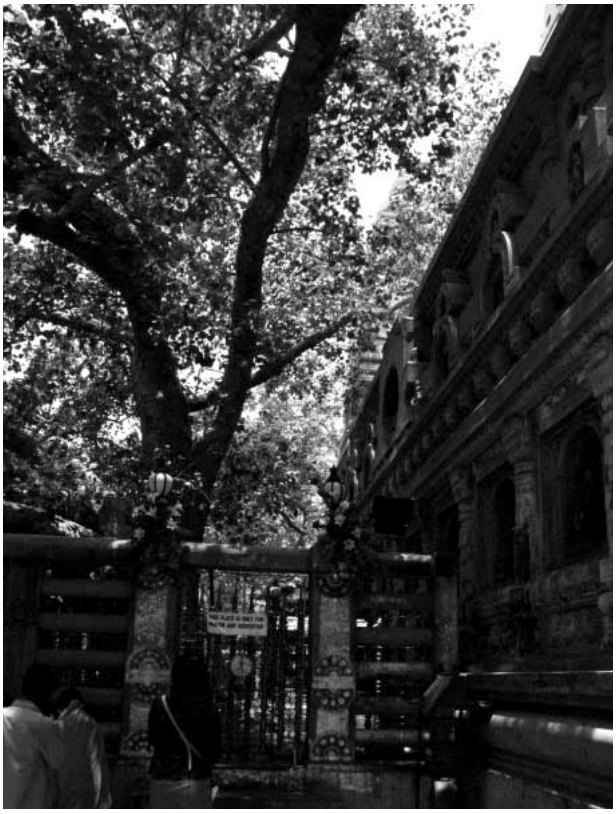
デリーに駐在して6年。この間に日本女性3人がインド人男性に嫁いだ場面を目の当たりにしている。いずれもお相手はITエンジニアー。又、インド外交官に嫁いだ日本女性は少なくとも2人；シン首相秘書官サルカール夫人や駐シンガポール・インド大使ジャイ・シャンカール夫人と、大和撫子の国際競争力の高さには驚かされる。日印国民交流は広がり深化しつつある。

インドによる月面無人探査衛星（チャンドラヤーン1号）
2008年9月打ち上げ予定。日中印3ヶ国の探査衛星が同時に月を周る新時代へ。

（2007年1月10日アンデラ・プラデーシュ州スリハリコタ宇宙センターにて打上げられた地球探査衛星）

今年5月26日75歳でエベレスト登頂に成功された三浦雄一郎氏
インド人が尊敬する日本人の一人。快挙をお祝い申し上げる。（3月21日ネパール入りされる当日午前ニューデリーにてお見送りした際に撮影）

ハリアナ州キドワイ総督閣下（88歳）
日本の投資の大半が集中するハリアナ州総督。マンモハン・シン首相やデリー地下鉄　スリーダラン総裁と並ぶ親日家でビハール州総督を2期歴任。イスラム教徒ながら仏教のよき理解者である。米寿をお祝い申し上げる。



世界遺産　ブッダガヤ（ビハール州）
釈尊が35歳の時、インド菩提樹の下で悟りを開き仏陀となったそのスポット。その金剛法座は花や金箔が捧げられている。（2008年5月20日現地にて）